のぞいてみよう！せんだいの歴史　ゆかりの絵画編

遊び心と余白の美 ―遠藤曰人の猫児図

第19回

仙台市博物館　学芸企画室　小田嶋なつみ

ニャンともかわいいたたずまい

猫に目がない私が、見た瞬間からぞっこんでした。墨で表された1匹の猫。たたずまいは「ちょこん」としていて、何かをじっと見つめているような後ろ姿です。尻尾は細めで、耳はピンと立ち、少し緊張しているのでしょうか。

添えられた句は、「さかつき（杯）の草にかくれぬ春野かな」。

草花が芽吹き始めた春野の陽気な雰囲気と酒宴の情景を詠んだ一句ですが、猫のことは一言も書かれていません。「ニャン」とも不思議ですね。でも、そこに遊び心があるのかも知れません。

作者の遠藤曰人（一七五八～一八三六）は江戸時代後期の仙台藩士で俳人として活躍し、句に添える絵画・俳画もよく描きました。

「猫児図」遠藤曰人筆
江戸時代後期（19世紀）　仙台市博物館蔵

「いいかげん」が「良い加減」

猫の描写にも、曰人の個性が光ります。まん丸なシルエットに、トラ柄の毛並み。墨のにじみによってフサフサした感触まで表現しているようです。そして、取って付けたような左前脚。ざっくりとした筆遣いは、いいかげんなようで妙に愛嬌があります。俳画ならではの軽妙さと遊び心に思わず「ニヤ」けてしまいます（猫だけに）。

余白が誘う物語

猫の背景には何も描かれていません。周囲の余白が、かえって1匹でたたずむ猫の可憐な存在を際立たせます。「描かない部分」が、見る人に想像の余地を与えるのではないでしょうか。背を向けた猫の視線の先には何があるのでしょう。宴会からの主人の帰りを待っているのでしょうか、それとも春野に舞うチョウを目で追っているのでしょうか。物語は見る人の心の中で広がります。

さて、曰人の作品は近年、そのユニークな画風に独特のかわいさとゆるさがあると人気を集めています。江戸時代の絵画が、現代の感覚にもすっと寄り添えるのは、すてきなことですね。時代を超えて愛される理由は、そこに「遊び心」と「余白」があるからかもしれません。いずれにしても、猫好きにとってはたまらない逸品です。

今回紹介した作品は仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース」からご覧いただけます。